

松場登美さんの仕事に学ぶ

柳原 邦光*

Man and the Region: A case of Mrs. Tomi Matsuba

Kunimitsu YANAGIHARA*

地域学論集（鳥取大学地域学部紀要）第7巻 第1号 抜刷

REGIONAL STUDIES (TOTTORI UNIVERSITY JOURNAL OF THE FACULTY OF REGIONAL SCIENCES) Vol.7 / No.1

平成 22 年 6 月 30 日 発行

June 30, 2010

松場登美さんの仕事に学ぶ

柳原 邦光*

Man and the Region: A case of Mrs. Tomi Matsuba

Kunimitsu YANAGIHARA*

キーワード：石見銀山，暮らし，土地の声，土地の力，わたし（自分），つながり，コミュニティ・アイデンティティ

Key Words : Iwami mines, daily life, voice of the place, power of the place, self, social ties(sociabilité), community identity

はじめに

近年、「地域」や「地域学」という言葉をよく耳にするようになった。それは社会の何らかの願望の現れであろうが、2つの言葉の背後にはどのような期待があるのだろうか。なぜ今「地域」なのだろうか、「地域学」なのだろうか。

地域学（あるいは地域科学）を英語表記すればRegional Science(s)になる。『地域科学入門』を執筆したW.アイサードによれば、Regional Science（アイサードは単数形で表記している）はすでに半世紀以上もの歴史をもつ。この学問は、地域を何らかの目的で人為的に線引きされた空間とは考えない。地域は、自然環境や政治・経済・文化など様々な要素が複雑に絡み合いつつも一定のまとまりをもった意味ある空間であり、人間の生活や幸福に深く関わる。それゆえ、諸学を総動員してこれらの諸要素の複雑な関係性とその変化をトータルに捉え、それに基づいて効果的な施策を考えて、人間の幸福に資する。おそらくこれがRegional Scienceの目的であろう¹。

「地域」や「地域学」の背後にあるものも、これと無縁ではないだろう。しかし、Regional Scienceが主として地域を構成する基本的な諸原理を客観的に解明しようとするのに対して、人と自然との相互関係の中で営まれてきた暮らしの仕方、そこでの人々の思いと心に視点を据えて、具体的な生のありようや人と人との結びつきから地域とその意味を捉えようとする見方もある²。この場合の地域は、生きているという実感のある場所である。

後者について、二つほど例を挙げよう。ひとつは、内山節の「『里』という思想」である。内山は地域ではなく「里」という表現を用いる。「里」は「理由なく自分の魂が帰りがたがる場所」、「ここで

* 鳥取大学地域学部地域文化学科

¹ W. アイサード『地域科学入門（1）』（大明堂，1980年），第1章を参照。原書はWalter Isard, *Introduction to Regional Science*, New Jersey, 1975. 地域科学会（Regional Science Association）の設立は1954年。

² 研究史については光多長温教授の整理を参照した（2010年度鳥取大学地域学部1年生必修科目「地域学入門」での報告）。

なら死んでもいいなという感覚」のあるところ、いろいろなことを理屈ではなく何となく全幅の感覚でそうだなと了解できる場所だという。それは生の世界だけでなく、死の世界とも、過去とも未来とも、つながっている、そういう感覚のあるところである。内山のいう「里」は、人間が様々な相互関係の中でこそ生きられることをよく示している。内山の視線は、この「里」での生活から、近代や国家・国民を捉え直し、グローバリゼーションに抗して生きることに向かう³。

もうひとつは、結城登美雄（民俗研究家）の「地元学」である。結城によれば、「地元学」は「理念や抽象の学」ではない。「地元の暮らしに寄り添う具体の学」である。ここでの主体は行政ではなく住民、すなわち人と人の関係に配慮して生活する人々である。「地元」とはこうした人々の相互関係によって成り立つ場所である。それゆえ、「地元学」は「その土地を生きた人びとの声に耳を傾け」、「これからの家族の生き方、暮らし方、そして地域のありよう」を学ぶ⁴。しかし、なぜ「地元学」なのだろうか。長い時間をかけてつくりあげられてきた暮らしの場、暮らしの仕方と知恵、その記憶、いわば人びとの生き方の基盤そのものを、当事者である住民の思いとは無関係に、無残にもまるごと破壊していく都市計画という暴力に対する怒りと危機感、そして抗い難い力を前にして仕事の痕跡をなんとかして残そうとする老職人の粘り強い意思への共感がきっかけだった、と結城はいう。「地元学」は次の文章に集約的に表現されている。少し長いですが、ぜひとも引用しておきたい言葉である。

経済を絶対の基準としてきた私たちの社会が揺らいでいる。大きいを良しとしてきた価値観が問われている。人は土地を離れて生きていくことはできない。地域とは家族の集まりである。もう一度、同じ地域を生きる人びとと関係を再構築するために、それぞれの地元で隠れている人や資源や知恵や哲学を学び直すこと。そして自分の暮らす場所の未来を他者にゆだねないこと。さらに、自分もまたここを良くしていく一人の当事者になること。その力を合流させ、自分たちと次世代が生きやすい場所に整え直すこと。それが私の地元学である⁵。

結城の著作や講演にははっとするような言葉が満ちている。圧倒的な迫力と説得力がある。地元の人々の「受け売り」だと結城は謙遜しているが、その力強さが東北や全国各地を自ら歩いて多くの人々との出会いから得られたものであることは間違いないだろう。結城の語りに登場するのは、過疎化し高齢化しつつある村の具体的な暮らしの細部である。そこから見えてくるのは、確かなものをもった人々の生き方とその隠れた力である。さらにいえば、それはわたしたちの生活や社会にとって重要なものは何かと問いかけている。「ここにあるものをいねいに見つめ直す」結城の「地元学」は、「地域」や「地域学」の背後にある願望を示唆しているように筆者には思える。

次に、筆者の所属する鳥取大学地域学部の地域学（以下、地域学と表記する）について簡単に紹介しておこう。地域学は主として次の二つの視点から地域を考えている。Regional Scienceの客観

³ 内山節・赤坂憲雄・田口洋美「座談会 地域を生きる思想 どこを魂の帰る場所と考えるか」、『季刊東北学』第6号（2006年）を参照。「『里』という思想」については、詳しくは内山節「『里』という思想」（新潮社、2005年）を参照。

⁴ 結城登美雄『地元学からの出発 この土地を生きた人びとの声に耳を傾ける』（農山漁村文化協会、2009年）、「まえがき」と序章を参照。

⁵ 「地元学」の始まりについては、結城登美雄「地元学をめぐって」、『季刊東北学』第6号（2006年）を参照。引用文は71頁。

的視点、構造的視点と、「わたし」の「いま、ここ」から「わたし」をとりまく種々の関係性や構造を捉える視点である⁶。というのは、次のように考えるからである。こんにちでは人と人とのつながりが稀薄化し、自分自身に直接関わりのないことについては想像し難くなっている。このような状況では、地域を実感できないか、遠く感じてしまう人も少なくないと思われる⁷。それゆえ、いきなり地域が人の暮らしにとって不可欠の自明な存在であるというところから発想するよりも、「わたし」の立場から多様な関係性のひとつとして地域の意味を問い直すことから始めるのが方法として有効ではないだろうか。筆者自身は、率直に言えば、「地域のために」という発想には違和感を覚える。なにかしら重苦しさがつきまとうからである。結城が「この土地を楽しく生きるための『あるもの探し』」が「地元学」だと述べているように、「わたし」が地域で煩わしさのなかにも楽しく生きていければと思う。残念ながら筆者自身には内山や結城のような地域についての確かな実感はない。鳥取大学の地域学は、筆者のなかにあるような「地域」に対する微妙な感情を率直に認め、そこから「地域」の意味を捉え直そうとしている。

そこで本稿では、石見銀山生活文化研究所・群言堂（鳥根県大田市大森町）の松場登美さんの仕事から、「わたし」と「地域」との関係について考えてみたい。松場さんは服飾デザイナーが本業で、年商10億円の会社を切り盛りしているが、地域アドバイザー、観光カリスマ、文化審議委員に選ばれるなど、まちづくりに貢献している人としてもよく知られている。もっとも、ご本人は、「気持ちよく暮らしたいだけで、まちづくりをしてきたつもりはありません」と、こうした評価には納得がいかないようである。

なぜ松場さんなのか。3点を挙げておこう。ひとつは後述するように、松場さんは「わたし」がとて強い人であるが、しかしというべきか、だからというべきか、「地域」を受容しそこから大きな力を得ていることだ。ここには「わたし」と「地域」との良好な関係がある。また、もうひとつ別の理由もある。地域学の究極的な目的は「生の充実」や「わたし（たち）の幸福」の実現に寄与することである。したがって、学際性が地域学の特徴のひとつとなる。われわれは諸学を総動員して地域学を構築しなければならない。しかし、これまで述べてきたことから明らかなように、アカデミックな知だけでは十分でない。重要なことは、内山や結城が指摘するように、生活の場に生きている知や優れた実践活動から多くを学び吸収することである。そうしなければ地域学は成り立たない。また、地域学の成果は人々の胸に届くものでなければならないから、それを可能にする表現形式を得ることも大きな課題である⁸。

こうした観点から見たとき、松場さんの仕事はきわめて魅力的なのである。2年前に初めて講演を聴いたときから、筆者はそのエッセンスをなんとかして地域学に吸収したいと考えていた。幸いにも、昨年、松場登美『群言堂の根のある暮らし しあわせな田舎 石見銀山から』(家の光協会)⁹が、森まゆみ『起業は山間から一石見銀山 群言堂 松場登美』(バジリコ)と同時に出版された。両書から松場さんのこれまでの人生、仕事や考え方がよく伝わってくる。そこで本稿ではこの2冊

⁶ これについては、柳原邦光『『地域学総説』の挑戦4』、『地域学論集（鳥取大学地域学部紀要）』第6巻第2号、2009年を参照。

⁷ 森岡清志編『地域の社会学』（有斐閣、2008年）、8-9頁。

⁸ この必要性については、古い作品（初出は1948年）であるが、芹沢光治良「死者との対話」（『芹沢光治良文学館10』、新潮社、1997年）が参考になる。また身体と言葉との関係も重要である。これについては、竹内敏晴『生きることのレッスン—内発するからだ、目覚めるいのち—』（トランスビュー、2007年）を参照。

⁹ 松場登美さんについての情報の多くはこの文献から得たものである。煩雑なので頁数を示すことはしない。

を中心的な資料として、また講演等も参考にしながら、「わたし」と「地域」との関係について考える¹⁰。最初に第1章で松場さんの仕事と考え方を詳しく紹介する。第2章では、鳥取大学の地域学が何を目的とし、どのような視点に立っているかを簡潔に述べる。第3章で、地域学の観点から松場さんの取り組みを検討し、最後に地域学に位置づけることを試みる。

1. 松場登美さんの仕事

山の中腹から眼下を見下ろすと、緑深い山あいには赤茶色の瓦屋根がきらめく集落を一望することができます。四方を山に囲まれた、まるですり鉢の底のような小さな町。この場所に身をおくと、自分が今ここに生きていることをひしひしと感じ、気力が湧いてくるのです。ここが、わたしの居場所。大丈夫、ここでならやっつけられる――。

松場さんは30年近く前、名古屋からご主人の実家のある町（鳥根県大田市大森町）に移り住んだ。そのとき、親戚の人にかげられた言葉はとてもしつこいものだった。「草の種は、たとえ落ちたところが岩の上であっても、そこに根を下ろさなければならぬ。」それほど大森は住むに厳しい寂れた町に見えたのであろう。ところが、松場さんは町の空気を寂しいとは感じなかった。自然の豊かさや、近所の人たちとの人情味あふれる付き合いや歴史ある町のたたずまいにとて感動した。そして何年か暮らすうちに、思うようになった。自分に授かった人生、授かった場所をよしとして生きていこう。この地に根を下ろし、それを幸せとして受け入れていけば、何かが見えてくるはず。ここで一生を暮らすのであれば、自分らしい生き方がしたい。周りの人たちとともに楽しい気持ちで過ごしたい、と。

冒頭に引用した一節は、このような心構えで大森町で暮らしてきた松場さんの現在の心境である。筆者はこのようにいえる松場さんをとて幸せな人だと思う。松場さんは大森町という土地や人々とどんな関係を築いてきたのだろうか。その目に見えてきたのは何だろうか。この章ではそんなことを考えてみたい。

(1)松場さんが大事にしてきたこと

松場さんは今、寛政元年（1789年）に建てられた阿部家という元の武家屋敷で生活している。阿部家の大森町での歴史は、大久保長安の銀山付役人として甲斐の国からやってきた阿部清兵衛に始まる¹¹。1601年のことである。現在町並みの残る大森町はこれ以降に形成されたようであるから¹²、

¹⁰ ここで参考にするのは、鳥取大学地域学部での「地域学総説」（地域学部3年生必修科目、2008年度と2009年度）の講演と、2010年2月5～7日に鳥取県鳥取市鹿野町で行われた「激動の時代を迎えて鹿野は今」での講演及び「土地の力に根ざしたまちづくり」と題したパネルディスカッションにおける議論である。このディスカッションのパネラーはほかに、作家の森まゆみ氏、狩俣恵一教授、民俗研究者の結城登美雄氏、鹿野町の長尾裕昭氏である。

¹¹ 石見銀山の運営において銀山付役人は重要な役割を果たした。その多くは石見の国の出身者であったが、他の地方の技術者も採用されている。阿部清兵衛はかなり早い時期に召抱えられている。切米は50俵3人扶持である。村上 直「近世初期石見銀山の支配と経営―大久保石見守長安時代を中心に―」、『徳川林政史研究所紀要』、1979年、338―339頁。

¹² かつての石見銀山は、鉾山町の銀山町と、代官所があって政治・経済の中心地である大森町とからなっていた。現在、「間歩」と呼ばれる坑道跡があるのがかつての銀山町、町並みがあるのが大森町である。大森

阿部家の人々は町の歴史をそのはじめから見てきたことになる¹³。大森町は2007年に世界遺産に指定された「石見銀山」の一部で、かつての家々と町並みがある程度残っている¹⁴。阿部家もそのひとつで、その周囲には落ち着いた感じのいい雰囲気が漂っている。

松場さんはご主人の大吉さんとともに古民家を再生してきた。1軒目が群言堂本店（江戸時代は庄屋の家だったという）で、阿部家が6軒目である。阿部家と血のつながりはない。それにしても購入するだけでも大変な費用を要するというのに、なぜ古民家再生なのだろうか。二人は大森町で暮らし始めたとき、漠然とではあるが、たった一本しかない通りの中ほどにある阿部家がかつての姿を取り戻せば、ここを起点に理想の町内ができると、その情景が目には浮かんだという。不思議なことだが、古民家を買って初めてのお店「ブラハウス」（群言堂の前身）をオープンしたのも、おそらくはこの夢の実現に向けての第一歩だったのであろう。松場さんは古民家について次のように語っている。「わたしは、いつも古い家から聞こえてくる声のようなものを感じていました。」「家が再生されていくのと同時にわたし自身も再生されてきたような気がします。」「阿部家には、効率や便利さ優先の快適な暮らしはありません。でもここには、現代人が忘れ去ってしまった大切なものがあるのではないかと思います。わたし自身、ここで暮らしていると毎日新しい発見があり、この家の空気に包まれて癒されていることを感じます。」ここに出てくる「古い家から聞こえてくる声のようなもの」、「再生」、「空気」、「癒される」とは、どういうことであろうか。

ところで、古民家再生といってもすべてを元通りに復元したわけではない。阿部家は県の重要文化財に指定されているので、所有者とはいえ自由にできないところがあるが、それでも阿部家は実に創意工夫に富んでいる。かつての阿部家には格式ある長屋門があったが、松場さんはこの門の復元を退けた。他を寄せつけないような高い壁ではなく、周囲の町並みや自然と溶け合うような簡素な門をつくりたかったからである。阿部家の玄関に足を踏み入ると、板に大書された「納川（のうせん）」の白い文字が目には飛び込んでくる。しとしと降る雨が小さな流れとなりそれが集ってやがては大河となって海に注ぎ込むように、様々な異質なものを受け入れていくことで海のように深く美しくなることを表現した言葉だという。書はかつて阿部家で暮らした中国人留学生の手になるものである。玄関からすぐのところにある座敷をみると、真ん中に大きな鉄の彫刻（吉田正純氏作）が置かれているが、違和感はなく静かな落ち着きを生んでいる。驚かされるのは、あちらこちらで

町が初めて史料に出てくるのは、1602年に大久保長安が銀山役人に「大森普請」を申し付けた書状においてである。大森町は銀山領の支配拠点となる町として形成されたが、史料が欠落しているため、詳しいことは分からない。和田美幸「江戸時代鉱山町の特質」、『たたら製鉄・石見銀山と地域社会 近世近代の中国地方』（相良英輔先生退職記念論集刊行会編、清文堂、2008年）、156、171頁。

¹³ 阿部家の暮らしぶりは阿部家七代目当主の阿部半蔵光格の日記（1832年）からうかがい知ることができる。地役人（土着の役人で幕臣ではない）としての俸禄はわずかなものだが、暮らし向きは豊かだった。光格は「山方掛り」であったが、絵師で、文化的な関心が高かったという。阿部家の蔵の押入れの天袋には、光格の描いた小鳥の絵が色鮮やかな状態で残っている。光格の日記は松岡美幸氏によって釈文が作成されている。松岡美幸「石見銀山附地役人・阿部光格の日記（その1）」、『古代文化研究』第9号、2001年、127-173頁、同「石見銀山附地役人・阿部光格の日記（その2）」、『古代文化研究』第10号、2002年、137-198頁。

¹⁴ 1974年に、大阪市立大学教授白木小三郎が大森地区の主要な建築物110軒を個別調査しているが、それによれば、19軒が武家住宅、91軒が町家である。城下町とは異なって、ここでは武家屋敷と町家が混在している。1986年の補足調査は、大森町内のほぼ全域約280戸を調査している。その結果、7割の建物が幕末から昭和初期にかけての建物で、町並みの景観がよく保たれてきたことがわかった。毛利和雄『世界遺産と地域再生一問われるまちづくり』、2008年、新泉社、52-55頁。

拾い物が利用されていることである。阿部家には広い台所があり、大勢の人たちが集まって食事ができる。ここはとても心地よい場所である。昔懐かしい立派なかまどが並び、長い大きなテーブルと小さな椅子がある。実は、テーブルは廃校になった小学校の階段の手すり板を組み合わせて作ったもの、椅子もかつて子どもたちが学校で使っていたものである。それでも昔からそこにあったかのようにおさまっている。台所からお風呂への外通路の壁には、ざるやかごなど、使いこまれた生活道具がかけてある。「世の中が棄てたものを拾おう。」これは松場さん夫婦のポリシーのひとつであるが、象徴的な表現ではない。文字通りそうなのである。あちこちで拾ったりもらったりして、そのまま、あるいは手を加えて使っている。かつて生活の中で用いられていたものが、新たな形で美しく生かされているのである。松場さんはこれを「用の美」ではなく「用の結果の美」として、この「用を果たした後の美しさ」、「人が毎日使い込んだ結果生まれ出る輝きを、何よりも美しいと思います」という。

松場さんはこうした精神のあり方を「復古創新」という言葉で表現している。古いものをそっくりそのまま蘇らせるのではなく、それを生かしながら、自分の感性や時代性を加えて新しい価値観を創っていくというのである。阿部家はまさにこの精神を具現しているといえるだろう¹⁵。

(2)群言堂の目指していること

「群言堂」は衣料品と生活雑貨のブランド名である。本店建物は大森町の家並みの中にあるが、本社建物は見事な古民家（社員食堂）とともに町並みから少し外れたところに山と田んぼに接して建っている。どちらも風景に溶け込んでいて、とても会社には見えない。筆者は誰かが古民家を移築して生活しているとばかり思っていた。それが社屋だと知ったときは本当に驚いたものである。この建物もまた群言堂の考え方をよく物語っている。

それにしても人口が500人にも満たない大森町で店を構えるとはとてつもなく大胆なことではないだろうか。最初の店「ブラハウス」¹⁶をいまの本店建物にオープンしたとき、周囲の猛反対にあったという。一日数往復しかバスの便がなく、観光客も今ほど多くはなかったからである。それでも、松場さんは「自分たちの表現の場は大森だ」というご主人の考えを信じ、「この町こそが自分に与えられた舞台だ」と受け入れた。二人には田舎の価値が認められる時代がきっと来るという夢があったからだという。この「田舎の価値」とは何だろうか。「よいものは都会にある」とか「新しいものがないものだ」という当時の人々の意識や時代の傾向に対する疑問は、今なら筆者にもわかる。しかし、「田舎の価値」となると何だろう。考えてもすぐにはわからない。自分自身の感覚や心の奥深くに問いかけて、一つ一つ確認していくことを求められているような気がする。松場さんの著書でも、すぐあとに、「わたしはものを通して何を伝えたいのだろうか」という、ものをつくることの意味を自問する文章が続いている。確信にいたるまでには松場さん自身のなかでも問いかけがあった

¹⁵ 阿部家は2008年の春から「他郷阿部家」として営業を始め宿泊できるようになっている。昔ながらの暮らしを再生するとともに、自分の考え方や生き方までも含めた暮らしのデザインをしていきたい、そしてこの暮らしを体験できる、居心地のいい場を提供したいという考えからである。阿部家の様子は『群言堂の根のある暮らし』に収められた美しい写真やホームページに見ることができる。

¹⁶ 「ブラハウス」の「ブラ」というのは、フィジー諸島で使われている挨拶語で「やあこんにちは」という意味だという。「松場登美一石見銀山一足元の宝を見つめて暮らしをデザインする」西村幸男、埼玉正浩『証言・町並み保存』（学芸出版社、2007年）を参照。

のではないだろうか¹⁷。

松場さんは群言堂のすぐ近くに「無邪く庵（むじゃくあん）」という電気も水道もガスもない小さな家をもっている。酒を飲み食事をしながら地域の人たちと語り合う場がほしいとの思いから手に入れた、大森町の中でも一番小さく質素な古い家だったという。この家はほかにも「文明を排除した家」「ろうそくの家」「五感のよみがえる家」と表現されている。筆者にとって興味深いのは、この家の修復工事を終えたときの松場さんの心の動きである。家は以前とはまったく違った顔をしているのに、重ねた時間の記憶がそのまま残されているようで、じっと眺めていると、ふるえるような感動が湧き上がってきた。古いものをよみがえらせ、そのうえに新しいものを創る「復古創新」の精神は、まさにこのときに生まれたのだという。この感覚、なんとなくわかるような気がする。それにしても過ぎ去った時間と生活をこれほど強く身体全体で感じることは、なんとという幸せな経験であろうか。

松場さんはさらに続ける。和ろうそくが暗闇をほのかに照らすなかになると、夜空に美しい光を放つ星がはっきりと見える。静かに流れる水の音、そよぐ風の音までが聞こえてくる。あらゆる感覚が研ぎ澄まされてくる。それだけではない。ろうそくのあかりを楽しみながら語り合っていると、誰もが素の自分に戻って、余分なものを脱ぎ捨て、素直に語り合えるようになる。この家では飾らない生き方をすることを学んだ。そして、「余計なものをそぎ落とし、素材そのものの美しさを引き出す仕事」がしたいと思うようになった。こうして心に浮かび上がったのが人の身を包む服、身体にとって無理のない服をつくることだったという。

群言堂は「無邪く庵」から生まれたのである。群言堂という言葉自体は、「納川」と同じく中国人留学生から学んだもので、「みんながわいわい好きなことを発言しながら、一つのよい流れをつくっていくこと」を意味している。「この町で、周囲の人とともに、よい流れをつくっていきこう。」これが群言堂の原点である。

(3)土地の声、土地の力

初めて松場さんの講演を聴いたとき、もっとも印象深かったのと同時に、実感として理解できなかったのは、「土地の声をきく」という表現だった。次の言葉も同じように気になった。「大地から力をいただいてもものをつくっているような気がします。」「土地の力に守られて今日まできたような気がします。」松場さんのいう「土地の声」、 「土地の力」とは何だろうか。著書を手にしたとき真っ先に心に浮かんだのは、この問いだった。

松場さんは服飾や生活雑貨のデザイナーである。しかし、松場さんはいう。デザインの勉強はしたことがない。実際、商品らしい商品ができるまでには何年もかかった。それでも買ってくれる人たちがいて続けることができた。ものの価値基準は商品そのものだけではない。もの以外の何か、商品が生み出す空気感や売り場全体がかもし出す世界観などの何かが作用したのではないか。とくに「この土地での暮らしをベースにデザインしていたこと」が大きい。母として妻として生活者として生きる部分がないと、デザインの仕事も判断の基準も生まれなかった。デザインはメッセージである。「こう生きたい」、「こう考えている」、「共感してほしい」、そういうメッセージを服に包ん

¹⁷ ブラハウスはカントリー雑貨の店である。最初から群言堂のように地域性を活かした仕事というわけではなかったようである。森まゆみ『起業は山間から―石見銀山 群言堂 松場登美』、バジリコ、2009年、75頁。

で送り出してきた。だから自分にとってデザインの基本は「自分が着たい服をつくること¹⁸⁾」だ。そして自分だけでなく、理想とする暮らしや生き方を同じくする人に似合うようイメージしてデザインしている。みんなのための服をつくろうと思えば、誰にも似合わないもの、誰にとっても生きないものになってしまう。しかし、「この人のために」と思ってデザインすれば、少なくともその人に似合う服ができる。松場さんは「個を思う感覚が、普遍的なものにつながっていくと信じている」という。

ここでは「わたし」はまさに「わたし」であることで誰かとつながっていく。すべての人を想定しているわけではないが、つながっていける、そう松場さんは感じている。この確信はどこから生まれるのだろうか。重要なのは、母・妻・生活者、そして「この土地での暮らし」であろう。問いへの答えは、「石見銀山で生まれるデザイン」と題した節(86-89頁)にみることができる。ここは実に興味深い。まず生地とデザインとの関係が述べられている。生地とデザインをあわせて考えるが、生地ができあがってきたとき、想像していたのと異なる場合がある。そんなときは最初に思った通りにするのではなく、やむをえない変化を受け入れて、生地をどうやって生かすか、頭を切り替える。また、生地とデザインがすべてではない。その土地の空気や気分にも影響される。場が変われば、いいと思ったものがそうではなくなることもある。「土地と自分との間に化学反応が起きているのかな」と松場さんはいう。

筆者が注目するのは、松場さんの場合、人やもの、土地との関係において「わたし」が絶対ではないことだ。それぞれの存在としての大きさを受け入れている。松場さんは「群言堂の服は土地から生まれる空気をまとっている」という。大森町では、都会のようなヴィヴィッドな色はしっくりこない。むしろ山陰の少し暗めな空を写すシックな色がいい。直線は自然の中ではめったにみられない。それよりも曲線がいい。「わたしがこの町で見たもの、聞いたこと、感じたことのすべてが、デザインに影響を与えていると思います。」「毎日、自分の暮らしの中で美しいものを見る目を磨いておけば、都会のメーカーにはできない、自分なりのものづくりができると思っています。」土地で暮らすなかで確かな目が培われ、そこから自分なりのものができるというのである¹⁹⁾。

松場さんの美しさの基準は商品名に現れている。群言堂の商品には「山時雨」とか「石路(つまぶき)」のような「野の花」の名前がついている。野の花は自然の姿のまま、「あるがまま、ただ咲いている」。決して強く主張することはないが、個性的で、心に響いてくる。「野の花に接しながら自然からいただくものの多さ」を日々感じるという。

群言堂には「鄙舎(ひなや)」と呼ばれる茅葺の家がある。これはかつての豪農の家で、広島県から移築されたものである。通常は社員食堂として利用されているが、ときに様々な形で人々が集まる場ともなる。移築したのは日本の当たり前で美しい風景を残したかったからだが、形だけの復元ではない。「その家の暮らしそのものを引き継ぎたい。」観賞するのではなく、暮らしの場であり続けたいというのである。この言葉の意味は別の表現でも説明されている。移築の際、解体された部材が組み立てられ、元の形を取り戻していくにつれて、家は心が満たされる空間となり、人が癒されるようになっていくという。阿部家の修復の際にも同じことがおきた。阿部家は松場さん夫婦が

¹⁸⁾ 「からだ が 楽で ころが 元 気。」これが群言堂のキャッチフレーズである。森前掲書、111頁。

¹⁹⁾ しかしながら、こうしてでき上がった衣服も100パーセントではない。選んで着こなしてもらってはじめて100パーセントになる。「服というのは、人が着ることによって完成するもの。……ゆだねる部分を残しておきたい」という。この「ゆだねる」という姿勢にも注目しておきたい。

手を入れる前は、荒れた、とても人が住めそうにない廃屋であった。修復工事の途中までは、「もう少し頑張っ。ちゃんと直してあげるから」と、「してあげる」という立場だったが、修繕が進むにつれて、家は品格を取り戻し、ある種の風格さえも醸し出すようになり、立場が逆転した。今では、「この家は、私に心の落ち着き、安心を与えてくれている」という²⁰。家の魂がよみがえるのであろうか。長い歳月を経る間に家に刻まれた何か、暮らしの記憶が、人を癒すのであろうか。松場さんはこれを「家の声」、「家の力」と表現している。

大森という土地には、人と人をつないでいく力もあるようだ。「こんな町にしたい」と夢を描き始めたときから不思議なことや偶然の出来事が増えてきたと松場さんは感じている。都会に出て行かなくても、心に思い描いた人が次々とやってくる。会う約束をしていた人たちが大森で出会うなど、「土地が人を引き寄せる」という。

「崖っぶちの神様」の話もとても興味深い。松場さんは、何か不思議な力に守られていることを常感じてきた。ある日、本社の裏山にかつて祠があったと聞いて、行ってみると、そこは土がえぐられて崖っぶちのようになっていた。ところが、「懐かしく、とてもあたたかい」、「懐かしい人に出会えたような、大きなものに包まれているような」感覚があふれてきて、涙が出て止まらなくなってしまった。この土地の神様に「よく来た」、「やっと来たね」と迎えられたような気がしたという。その土地はもともと阿部家の所有地であった。阿部家にはかつて「登美」という女性がいたという。不思議な話である。

松場さんと古い家や大森という土地との間には、生活においても仕事においてもこれほどまでに確かな感覚をともなった関係があるのである。これが松場さんのいう「田舎の価値」なのだろうか。群言堂は「土地に根ざしたものづくり」をポリシーにしているが、それはこのような土地や自然に対する感覚や敬意から生まれたのであろう。

(4)地域について

松場さんには、おそらく地域を何よりも優先して考えるという発想はない。「まちおこし」や「地域活性化」という言葉にも違和感を覚えるようだ。それよりも人や日常の暮らし、仕事を大事にしている。町おこしや観光を日常生活とは別個のものとし、自分の本業をほったらかして町おこしに励むことには疑問を感じている。「一人ひとりが幸せで、楽しい暮らしができ、ビジネスが成り立てば、それこそが町おこしになる。」松場さんは、自分の本業をしっかりとやって、いい店をつくる、それが町おこしにつながると考えているのである。観光についても同じである。観光のために特別に何かをつくるのではなく、「暮らしている人々が、美しく魅力的な暮らしをしていれば、観光客は自然に集まってくる」、生活者こそが主役で、日々の暮らしこそが大事なのである。

松場さんが地域に関わるのはこのような観点からである。その例を二つほど挙げよう。ひとつは「鄙（ひな）のひなまつり」である。これは年に一度のイベントで、女性たちに田舎の自然の魅力や暮らしの素晴らしさに目を向けてほしい、女性が変われば地域も変わるという思いから始まった。「田舎に暮らす女性の意識を高め、より豊かな暮らしを考える」をテーマに講演やシンポジウムを行い、最後を「鄙舎」での大宴会で締めくくった。「ひなまつり」であるから、男性が世話し盛り上げた。当初はよそから嫁いできた女性たちしか参加しなかったが、やがて地元の人たちも都会からやってきた人たちも加わって大勢で楽しんだという。ところが、松場さんは10年目を区切りにやめ

²⁰ ホームページの「阿部家日誌」を参照。

てしまった。イベントを通して得たことをそれぞれが暮らしの中で実現していく時期になったと考えたからである。今では家々の前には田舎の道具や野の花がさりげなく飾られて、人々の目を楽しませている²¹。また、町の会合では女性たちから説得力のある面白い意見が出るようになったという。

もうひとつ、大森町では、「納川の会」(NPO)を中心に1992年から年に1度、町民が集まって集合写真を撮り、町民カレンダーをつくって全戸に配付している。少し高い位置から、その年その年の住民たちの笑顔を撮影した写真で、みんな顔を少しだけ上げて高いところを見つめている。何年分ものカレンダーを並べてみれば、姿が見えなくなった人もあれば、新たに加わる人もいるだろう。まさしくこれは一人ひとりの顔が見える、美しい町の記憶である。町民でなくとも、写真を通して大森町に暮らす人々の生活が感じられて、感動を覚えてしまう。

写真にはWe are hereという言葉が添えられている。「私はここにあります」ではない。「わたしたちは、ここにあります」である。これはどういう意味なのだろうか。松場さんは次の文章を引用して説明している。「人間の欲望の一番高いところにあるのは、『自己実現』と言われている。つまり『パーソナル・アイデンティティ』を追究していくということだ。だが、本当はもうひとつ先のレベルがある。それは『コミュニティ・アイデンティティ』だ。」この文章を読んだとき、自分達の目指しているものがコミュニティ・アイデンティティだと確信したという。なるほど、松場さん自身、群言堂でしてきたことを振り返って、「私たちは人が集る、そういう場所づくりをしてきたのではないかと思います」と述べたことがある。これまでしてきたことの意味がはっきりと見えてきたのであろう。町民カレンダーを見ていると、人と人が結び合う場のある幸せが伝わってくる。

(5)根のある暮らし

根は、ふだんは土の中にあって見えません。しかし、どっしりと根を張っているから、木はすくすくと伸びていきます。根さえしっかり張っていれば、いつかは芽を出し花を咲かせることができる。そして、果実も手に入れることができます。

いま、こうして仕事をし、暮らしていくなかで、いちばん大事なのは、次の世代そのまた次の世代に何が遺せるかということではないかと思っています。遺すというのはお金や資産のことではありません。継続していくためにはそれも大事ですが、本当に大事なのは、暮らしや生き方ではないかと思うのです。いまは幼い子どもたちが大人になったとき、この町は小さいけれども素晴らしく豊かだということを知っていてほしいのです。

ここでいう「根」とは何か、これはもう明らかであろう。筆者は松場さんの講演や著書に心を揺さぶられた。これまで見ようとしてこなかった部分をみせられたような気がするが、不快さはない。それどころか、これからどこに目をすえていけばいいのか、どう生きていけばいいのか、希望と大

²¹ 筆者は地域学部の授業で講演をしていただくよう松場さんをお願いしたとき、実をいえば、ご本人のことはほとんど知らなかった。新聞記事を通じて、「ブラハウス」をつくって運営しているのが松場さん夫婦で、新たに「群言堂」ブランドを立ち上げたことくらいである。しかし、筆者にはそれで十分だった。「ブラハウス」を訪ねたことが何度かあって、大森の町がとてもいい感じになってきたと実感していたからである。「ここには何かがある」という確信が筆者にはあった。

きな示唆とを与えられたように思う。わが身を振り返ってみると、筆者はつながりをどこまで思い描くことができるだろうか。今を生きる人々、過去の人々、未来の人々、さらにはそれぞれの時代の土地や社会について、どこまで想起できるだろうか、つながっていると実感できるだろうか。

松場さんが最近好んで用いる講演のタイトルは、「足元の宝を見つめて暮らしをデザインする」である。著書を熟読して、「なるほど」とタイトルの意味に納得できた。「素の自分」を見つめ、そこから考えればいい。難しく考えることはないのだ。

2. 地域学とは何か

松場さんの仕事から地域学は何を学ぶことができるのか。これを明らかにすることが本稿の課題であるが、この問題に入る前に、鳥取大学地域学部の地域学の概要を下記の3点に絞って少し詳しく説明しておこう。

(1)なぜ、今、地域なのか

なぜ、今、地域なのだろうか。わたしたちの生活は様々な制度ぬきには成り立たない。諸制度を支えているのは、西欧近代の生み出した「自由」で「平等」な「個人」と「人権」という理念、そして国民国家である。ところが、グローバル化が進む今日では、国民国家の役割は小さくなりつつある。すべてを国家という枠組みで考え決定できる時代ではもはやない。また、「個人の自由」が徹底して追求され、個人化 (individualisation) が著しく進んだことによって、新たな問題状況が生まれている。人々がかつてのように強固な集団的な枠組みや規範に縛られることを好まなくなり、そうしたもからある程度自由に生きることができるようになった。ところが、その一方で、国家の諸制度が機能し難くなり、集団的なものにも守られなくなって、人は今や社会的なリスクに直接さらされている。自由で平等な個人という理念と国民国家だけでは、「わたし(たち)の幸福」は実現できないのである²²。さらにいえば、西欧近代の諸理念そのものが招来した深刻な問題状況が今まさにあらわになったのかもしれない²³。

今日、求められているのは、国家よりも身近なところでわたしたちを支えてくれるものではないだろうか。もっと具体的な人と人との関わりの中で人間としての存在感を実感して生きることではないだろうか。人はみな「支え、支えられる関係」を必要とし、そのための具体的な「場」なくしては生きられないのではないだろうか²⁴。地域という発想の原点にあるのは、このような要請であろう。

(2)地域学は何を目指しているのか

地域学の目的は、はっきりしている。一人ひとりの「生の充実」や「わたし(たち)の幸福」の

²² 宇野重規「社会科学において希望を語るとは 社会と個人の新たな結節点」, 東大社研・玄田有史・宇野重規編『希望学1 希望を語る 社会科学の新たな地平へ』, 東京大学出版会, 2009年, 273-276頁。

²³ 普遍性と抽象的な個人を追求する近代の理念は、人々の視野を狭くし、自然をはじめとして複雑な諸関係のなかで展開される人間の生活の諸相を見えなくしてしまったと内山はいう。内山前掲書, 11頁, 18-21頁参照。

²⁴ ジャン＝ポール・ヴィレーム「超近代 (ultramodernité) の文脈における宗教」, ジャン・ボベロ, 門脇健編『揺れ動く死と生』, 晃洋書房, 2009年, 169-197頁。「居住地としての地域」が機能を果たせなくなっていること、新しい地域社会が求められていることについては、森岡編前掲書第1章を参照。

実現に寄与することである。そして、地域学は、人は人として安心して幸福に生きていくために、何らかの「関係」とそのための「場」を必要しているという前提に立っている。地域学の特徴は2つある。ひとつは、このような「関係」と「場」に必要な諸条件とそれを実現する方法を「地域」という空間的な枠組みで考えること。2つめは、次の2つの視点から地域を捉えようとしていることである。すなわち、地域を総体的・客観的に捉えようとするRegional Scienceの視点と「わたし」の「いま、ここ」から考える視点である。

さらに付言すれば、われわれは地域を固定的に捉えているわけではない。地域は「わたし」が従属すべき絶対的で変わることのない存在ではない。地域は現に在るもの（現実の地域）であると同時に、未だ実現していないもの、一人ひとりの「生の充実」や「わたし（たち）の幸福」のためにこうであってほしいと望まれるもの（望まれる地域）でもある。地域学の課題のひとつは、この隔たりをしっかりと認識し、これを埋めるべく、絶えず現実の地域を見つめ再検討することである。したがって、当然のことながら、地域学は「まちおこし」や「地域活性化」といった次元にとどまるものではない²⁵。

空間的の広がりについては、決して一定の大きさを前提にしているわけではない。人々が抱えている具体的な問題によって検討すべき地域の範囲が決まる。もちろん、地域を考える視点のひとつは「わたし」の「いま、ここ」であるから、日常の生活空間であるローカルな空間が重要な出発点になる。しかしながら、「わたし」の「いま、ここ」からスタートして、様々な関係性や構造を捉えようとするのであるから、必然的に、われわれの視野にはローカルな空間をこえた様々な空間が入ってくることになる。リージョナル、ナショナル、トランスナショナル、グローバルなどの空間である。

(3) 地域を見る二つの視点と本稿の課題

地域学には、すでに述べたように、二つの視点がある。ひとつは、アイサードのRegional Scienceの系譜に属するもので、地域の存在を自明なものと考えて、対象から距離をおいて地域全体を捉えようとする〈客観的な視点〉、〈構造的な視点〉である。現実の問題に応じて「現に在る地域」を説明しようとするとき、「地域のマトリクス」（光多長温）が効果的である。これによれば、地域とは自然環境（生態系軸）と人間の営み（文明系軸）の相互作用から生まれたもの（二つの軸の交点）である。生態系軸は地域の土台をなす自然・環境・地盤・地質を、文明系軸とは、土台の上で営まれる人間の生活をいう。これが地域を客観的に捉えるための基本的枠組みであり、地域性をトータルに把握する試みはこの枠組みにしたがって行われる²⁶。

²⁵ なぜこのようなわかりきったことをいうのかと思われるかもしれない。筆者は地域学部の「地域学総説」（3年生必修科目、一部を市民に公開している）で、住民の口から厳しい言葉が放たれるのを聞いて絶句したことがある。「近頃、地域学がはびこっている。」この言葉は何を意味していたのだろうか。地域のためと称して、住民の生活実態を無視したとんでもないことが行われている、イベントばかりを企画して無理やり住民を動員している、あるいは大学の教員が知的権威をかさにきていい加減なことばかりして住民に迷惑をかけている、ということだろうか。いずれにしても、怒りを含んだ、きわめて強い否定の言葉である。「ウィルス」にならないためには、少なくとも、地域学が何を目指しているのか、それをどのような視点と方法で実現しようとしているのか、明確に説明する責任がわれわれにはあるだろう。

²⁶ 詳しくは、柳原邦光、光多長温・吉村伸夫・一盛真・家中茂・藤井正『『地域学』を創る—鳥取大学地域学部の試み—』『地域学論集（鳥取大学地域学部紀要）』第4巻第3号、2008年、第2章「地域学について（光多長温）」参照。

もうひとつは〈「わたし」からの視点〉である。この視点の場合、地域の価値を自明視せずに、それをいったん脇において考える。というのは、地域という枠組みから発想するとき、「一人ひとりが生きられる」という地域に期待される役割を見失ってしまう危険性があるからである。また、個人化がさまざまな問題を生んでいるとはいえ、「個人の自由」は尊重されるべき価値である。「わたし」から発想することで、「個人の自由」を前提にした上で「わたし」をとりまく様々な関係性や構造を具体的に思い描き検証することができるようになるのではないか。このアプローチは徹底した個人化に起因する諸問題を照らし出すのではないか。「わたし」から出発して「みんなに関わること」、すなわちさまざまな形の「公」を見出すことができるのではないだろうか。

それでは、「わたし」を包み込んでいるさまざまな関係性と構造をわれわれはどうやって捉えることができるのだろうか。〈「わたし」からの視点〉を提示した仲野誠は、次の3つの知的往復運動を提案している。①「わたし」の「いま・ここ」を規定している社会構造・産業構造・価値／規範・制度・振る舞いのなどの次元を自由に往復して、そこに「わたし」を位置づけること、つまり、「わたし」を相対化すること（次元間の往復）、②わたしたちの日常であるローカルと、それと密接に関連しているナショナル、グローバルのレベルとの間を往復して、「ここ」を相対化すること（空間の間の往復）、③過去・現在・未来という時間の間を往復して、「いま」を相対化すること（時間の間の往復）、である²⁷。換言すれば、これは「わたし」の「いま、ここ」をしっかりと位置づけ、さらにはそれをこえる試みだといえるだろう。

これに関連してもうひとつ重要なことは、地域学を構成するのは西欧近代に由来するアカデミックな知だけではないということである。地域学の目的は「生の充実」や「わたし（たち）の幸福」の実現に寄与することである。そうだとすれば、われわれがまず目を向けるべきは、日常の生活空間とそこでの具体的な暮らしである。われわれは、この空間ですでに存在している知、また日々新たに生み出されている知に学ばなければならない。優れた実践活動から学ばなければならない。地域学はこのような知を吸収して理論化されなければならない。地域学はまさにアカデミックな知と「生活の知」とが出合う場なのである。

さてそこで本稿の課題である。本稿で筆者が特に関心をもっているのは、〈「わたし」からの視点〉である。この視点に立って、「わたし」と「地域」との関係性を、理論的ではなく、具体例を通して検討することである。具体的な暮らしの現場から立ち上がってくる、生き生きとした知から学んで、地域学の構想に組み込むことである。松場登美さんを取りあげたのはこのためである。

3. 松場登美さんの仕事に学ぶ

(1)人と土地との相互作用

松場さんは三重県津市芸濃町に生まれ、若き日を名古屋で働き、30歳を過ぎてから大森町で暮らし始めた。1981年のことである。そして今、生まれ故郷でもなく、名古屋でもなく、石見銀山が「わたしの居場所」である。初めて大森町にきたときから「妙に落ち着いた気分」になって、こんな山の中で人が暮らしているのを見て「すてきだ」と思ったというのだから、よほど相性がいいのだろう。

²⁷ 詳しくは、柳原邦光『『地域学総説』の挑戦4』、『地域学論集（鳥取大学地域学部紀要）』第6巻第2号、2009年、第1章第2節「仲野誠の問題設定—『わたし』と『いま・ここ』からの地域—」を参照。

松場さんが初めて大森町を訪ねたときの様子を森まゆみさんは著書の中で次のように描写している。「切り崩しのようなトンネルを越えると山の谷間に、まるでタイムスリップしたような美しい昔の町並みが続いていた²⁸。」住民数約500名の、時代に取り残されたような小さな町だった。

しかし、町を取り巻く状況は大きく変わっていく。その変化を概観しておこう。松場さんが移り住むよりもずっと以前のことであるが、1957年に、昭和の市町村合併の関係で、町の誇りと文化財を守ろうと、全戸が参加して「大森町文化財保存会」を結成し、地道な保存活動を始めている。この後、文化庁を起点として石見銀山に少しずつ光が当たり始める。1969年、銀山が国指定の鉱山遺跡となり、72年には歴史的建造物の町家数軒が国重要文化財となる。大森町が国の重要伝統的建造物群保存地区に指定されたのは87年である。そしてこの指定が契機となって住民による「ゆったりとしたまちづくり」が開始する。この頃から古い家が修築されて町の景観が少しずつきれいになっていったようである。ところが、90年代半ばに国と県が世界遺産登録に向けた動きをスタートさせ、2001年に暫定リスト入りし、2007年、劇的な形で世界遺産に登録された。この結果、かつて年間10万人程度にすぎなかった観光客は、今や80万人を上回るまでになっている²⁹。松場さんの「ブラハウス」がオープンしたのは1989年、群言堂ブランドを立ち上げたのが1994年であるから、大森町を取り巻く状況が大きく変わりはじめたときに仕事を本格化したわけである。ちなみに、世界遺産登録には懸念を表明していた³⁰。

さて、この節の目的は、松場さんと地域との関係を検討することである。松場さんにとって石見銀山（大森町）とはどういう存在なのか。まずは言葉の問題から考えよう。松場さんは著書では「地域」という言葉をほとんど用いていない。頻出するのは「土地」である。たとえば、「土地の声」、「土地の力」というように。なぜだろうか。筆者の場合、率直に言って「地域」という言葉の背後にはほとんど何も感じない。ところが、「土地」だと、人々の暮らしが積み重ねられてきたところ、精神的・文化的な何かがある空間という感じがするのだが、松場さんはどうなのだろうか。森さんの本を読むと、松場さんはこどものときから「自分」があって、かなり「個性的」だったようである。もちろん、現在はそれに磨きがかかって魅力を放っているのだが、その一方で、「さずかった場所」、「さずかった人生」というように、「さずかった」ものを受け入れるところもある。自然や土地や家への畏敬の念もある。決して「自分」がすべてなのではない。

「土地」、とくに石見銀山の存在が大きい。この町で暮らすことが、デザインに限らず、様々な着想や判断基準（松場さんのいう「ものさし」）、強い確信の源になっている。さらには活力までも得ているようである。その松場さんがデザインするものが群言堂の商品として素晴らしい売り上げをみせているということは、石見銀山発の「美のものさし」（空気感や世界観）がただのローカルなものさしではなくて、全国各地の人たちにも通じる何かをもっているということだろう。

それだけではない。群言堂を中心にして様々な人たちとのつながりが生まれている。大森町は山間の町だが、それにもかかわらず、様々な人々がやってくる。群言堂の本店を見たくて全国からやってくる人たちがいる。中国人やアメリカ人、フランス人、芸術家や大学生もやってくる。そもそも

²⁸ 森前掲書、53頁。

²⁹ 大國晴雄「石見銀山遺跡の文化的価値と世界遺産登録への歩み」、『地盤工学会誌』、56-12 (611)、2008年。

³⁰ 森前掲書、198-200頁。この間の経緯については、毛利和雄前掲書に詳しい。とくに、14-23頁、43-80頁を参照。

群言堂の社員からしてそうである。もちろん、石見銀山が世界遺産になる前からである。かつての寂れた大森町を知る筆者にとって、これはまったく想像を越えた事態である。これも「土地の力」なのだろうか。

石見銀山は徳川幕府の天領で、往時には江戸をはじめとして各地から様々な人々がやってきたし、石見銀山からも各地の金銀鉱山に出かけて行った。江戸期の『銀山旧記』などの史料には、16世紀前半に繁栄を極めて、人口は20万人にも及び、京都や堺の町にも劣らないほど人々が集まったと記されているという。あの狭いところにそれほど多くの人々が住んでいたというのは信じがたいが、それでも数万人はいたのではないかとみられている。石見銀山は巨大な鉱山都市だったのである³¹。その記憶が、あるいは何かが、「土地の力」として今も大森町に生きているのだろうか。

今、大森の町を歩けば、不思議な思いにとらわれる。以前と違って活気を感じる。群言堂や中村ブレイスといった活力ある企業の活動、住民の暮らしとさまざまな努力、関心をもってやってくる人々によって、古民家がそうであったように、町もまた蘇りつつあるのではないか。大森町に新たな歴史を刻み込み、「土地」に新たな力を加えているのではないだろうか。世界遺産として登録されたことは、この町の行方にどのような影響を及ぼすのであろうか。

(2)過去とつながる

阿部家に入ると、懐かしく感じる。筆者は古い家で生まれ育った。祖父母の家は棟札によれば19世紀の初めの建物だったし、父母の家は、祖父が購入したのだが、もっと古くて、筆者が子どもの頃に築300年といわれていた。2つの家はもはやないが、古い家を見るとかつての暮らしを思い出し、心地よくなる。

松場さんは筆者よりもはるかに敏感である。初めて大森町を訪ねたとき、阿部家を中心に蘇った町並みが心に浮かんだというのも不思議なことだが、家が修復されていくときに心の中に生じた変化には、彼女の感性だけでなく、家のもつ力のすごさも感じる。かつて住んでいた家というわけではないのに、「癒される」とか、「心の落ち着き、安心感を与えてくれている」というのだから。

土地についても同様である。初めて訪ねたのに「妙に落ち着いた気分」になり、「崖っぶちの神様」のところでは「懐かしい人に会えたような、大きなものに包まれているような」感覚になって涙がとまらなかったという。不思議なことだが、生まれ育ったところや名古屋屋についてはそうでもないようだから、これこそ「土地の力」なのであろう。

拾い物を使って活かすのは徹底している。講演で、「家が解体されると聞けば大急ぎで駆けつけます」ときいたときには、その姿が目には浮かぶようで微笑ましかったが、なんと拾い物保管用の「倉庫」が2つもあるという。その「倉庫」自体が廃校になった小学校とかつての農協建物であるから、やはり半端ではない。拾い物を活かすのも、とてもうまい。実際、筆者は阿部家を訪ねたとき、拾い物を使っているといわれるまでまったく気がつかなかった。違和感などなくて、とてもいい雰囲気だった。

それにしてもこれらの事実をどう考えればいいのか。思うに古民家も拾い物もみな過去の暮らしのかけら、過去の痕跡である。土地もまた過去を伝えるものである。歴史家は歴史の舞台を何度も訪れては、過去が身体に入ってくるのを待つ。しかし、松場さんの場合、その必要はない。

³¹ 道重哲男、相良英輔編『街道の日本史38 出雲と石見銀山街道』、吉川弘文館、2005年、147頁、村上前掲論文333頁、『輝き再び石見銀山—世界遺産への道』(改定版)、山陰中央新報社、2006年を参照。

ずっと続いてきた暮らしの舞台でさまざまな過去の痕跡に囲まれて日々を送っているからだ。筆者には、過去の暮らしの積み重ねがその痕跡を通して日常のなかに滲み出ているように思われる。ある意味では、過去が生きているといえるのではないだろうか。

古いものをみたときに感じる懐かしさや何とはなしの安心感。これはおそらく誰にも経験があることだろう。こうした感覚の意味について、内山節は『「里」という思想』のなかで語っている。群馬県上野村の内山の家には、前の所有者が使っていた餅をつくための巨大な臼がある。内山自身はその頃の事をまったく知らないが、臼をみていると、「この臼とともにあった過去の歴史が、臼自体のなかに、記憶として残っているような気がしてくる。」臼は長い年月にわたって暮らしや仕事を支えてきた。臼にはその長い時間が蓄積されている。臼は、それとともにあった暮らしの物語、餅をつく祭りの物語に包まれて存在している、と内山はいう。次の文章はわれわれがどういう時代を生きているのかを考えると、重要な示唆を与えてくれる。

人間の身体にも、身体の記憶があるのではないだろうか。精神は記憶していないが、身体は記憶している、というようなものがあるのではないだろうか。そればかりか、ある種の道具にも、建物にも、大地にも、地域にも、それ自身がもっている記憶があるのかもしれない。そういったさまざまな記憶に支えられながら、人間が人間でありえたのだとしたら、数多くの記憶を消滅させていった二十世紀の社会は、人間の何かを破壊し続けていたということになる³²。

この指摘が妥当か否か、筆者にはわからないが、説得力があると感じている。松場さんのしっかりとした確信の理由の一部がこれによって説明できるように思うからだ。日常生活のなかで過去がみえること、過去を感じられるということ、過去が生きているということ、この意味で過去とつながっていること、松場さんの暮らしにはそれがある。

記憶というとき、法隆寺の棟梁であった西岡常一のいう「手の記憶」も、筆者に大きなインパクトを与えた。西岡は法隆寺の棟梁の家に生まれ、法隆寺をはじめとして様々な時代の神社仏閣の修復・再建にあたった有名な宮大工である。彼のいう「手の記憶」とは宮大工の技であり、職人の手から手に引き継がれてきた記憶である。学校のように教えられて頭で学ぶのではない。自らの手を通して身体で覚えたものである。西岡は「手の記憶」のなかに長い間引き継がれてきた知恵が含まれているという。宮大工にとって古い建築物の解体修理はいにしへの職人たちの知恵に触れるまたとない機会である。法隆寺は樹齢千年をこえる檜を用いて建立されているという。かつての職人たちはそのような長い時間を生きた檜に挑んだのであり、自然に対する深い理解と知恵があったという。西岡は職人たちが残した建築物と向き合い、身体でその知恵を自分のものにしてきたのである。だから、過去は手応えのある確かな存在なのだろう。西岡は奈良の薬師寺西塔を再建したとき、東塔よりも少し高めに造っている。300年たった頃には、建物が沈下をやめて落ち着き東塔と同じ高さになるからだという³³。これにはとても驚いたが、西岡の本を読めば、いにしへの職人たちがつくった塔と同じように風雨に耐えて建ち続ける建物を造らなければならないという強烈な責任感と、遠い未来をみすえる確かな時間感覚とがひしひしと伝わってくる。このような感覚が生まれたのは、

³² 内山前掲書、29-31頁、42-43、83-85頁。

³³ 西岡常一『木のいのち木のこころ(天)』、1993年、草思社。

西岡が「手の記憶」によって過去としっかりつながっていたからではないかと、筆者は考えている³⁴。

松場さんの著書のタイトルは『群言堂の根のある暮らし』である。「根のある」とは、筆者が思うに、つながりをもつことであろう。何とつながるのか。もちろん人と人とのつながりが重要だが、それだけではない。土地とつながること、過去とつながること、過去の人々の営みや思いと日常においてつながること、そしておそらく死者とのつながりもあるだろう。こうした様々なつながりが「現在」を生きる、有限の「わたし」の生に、厚みと広がりをもった豊かな時間を与えてくれるのであろう。

おわりに

デザインするとき、みんなのための服をつくろうと思えば、誰にも似合わないもの、誰にとっても生きないものになってしまう。自分が着たい服、自分に似合う服をつくる。これが松場さんのデザインを考えるときの出発点である。これは地域についてもいえるかもしれない。まず「わたし」から、生活する当事者としての「わたし」から、考えてみる。そこではじめて見えてくるものがあるのではないか。これが「わたし」からの視点である。本稿での筆者は、地域を自明の前提とせず、地域の意味を問うという立場で考察している。

もちろん、松場さんはこのような立場ではないが、基本は「わたし」である。講演でまちづくりについて問われることが多いが、まちづくりなんて考えてやったことはない。自分が気持ちよく暮らしたいだけだ。自分たちのために、自分の人生のためにやっているだけだ、という松場さんである³⁵。しかし、この「わたし」は、同時に、それと自覚しないまま人が集まる場所づくりをしてきた、“We are here”を社是とする「わたし」である。授かった土地とつながり、過去とつながり、様々な地域で暮らす多くの人々とつながり、暮らしを将来の世代に遺すことを考える「わたし」である。中国人の留学生や先達から、自分の考えを表現するのに相応しい言葉を学び、暮らしと仕事に活かそうとする「わたし」である。決して、現在と未来しか見ようとししない人間、根をもたず「漂流する個人」³⁶ではない。

「わたし」を大事にするとともに、さまざまなつながりのなかにある。だからこそ、「生きていることをひしひしと感じ」、「ここが、わたしの居場所」といえるのであろう。

いつだったか、ある町で行われたパネルディスカッションで、聴衆から質問が出た。40歳代と思しき女性だった。自分に合うまちを探しているが、みつからない。どうしたら見つけることができるだろうかという趣旨だったように思う。自分は変わるつもりはない。自分にぴったり合う場所が必ずあるはずだ。それなのにみつからない。自分の居場所だと思えるところがない。どうしてだろう、どうしたらいいだろう、そういう風に筆者には聞こえた。松場さんの回答は予想できたが、この質問は筆者にとって大きなヒントになった。これは質問者だけの問題ではないと思ったのだ。わたしたちはいつのまにかまるで自分がすべてであるかのように思って生きてきたのではないか。求めてばかりいるのではないかと。

³⁴ いうまでもないことだが、過去とつながっていることがいつも幸せとは限らない。たとえば、岡真理『記憶／物語』、岩波書店、2000年、ピエール・アスリーヌ『密告』、作品社、2000年を参照。

³⁵ 森前掲書93-94頁。

³⁶ 内山前掲書、27-28頁。

つながりは、今年2月に鳥取県の鹿野町で行われた「土地の力に根ざしたまちづくり」と題したパネルディスカッションにおいても共通の課題だった。このとき結城登美雄さんは重要な指摘をしている。結城さんによれば、村はこの世の人だけで成り立っているのではない。村にはみんなで踊る踊りがある。代々伝えられてきた踊りがある。そこでは覆面をした人も踊っている。踊りの先に死者を追憶し、死者とつながっているのだと。また、いくつかの村の古くからある習慣をとりあげて、その習慣が死と向き合い、死を自然なこととして受け入れて生きる覚悟を前提としていること、人間や自分よりも大きな存在を儀礼や習慣を通して身体で覚えてきたことなども紹介している。つながりというとき、この世のことだけが重要なのではない。死者や死の世界とのつながり、大きな存在とのつながりも考えるべきだというのである。

「わたし」の「いま、ここ」から考えることは、小さな世界を問題にしているように見えるかもしれない。実際は、そうではない。「わたし」が「いま、ここ」で「生きている」とか「居心地がいい」と感じるのはなぜか。あるいはそう思えないとすれば、それはなぜなのか。この自分自身に対する率直な問いこそが、見えなかったものを見るようにするだろう。それには、わたしたちはもっと謙虚になるべきではないだろうか。松場さんがいうように、「素の自分」に戻って余分なものを脱ぎ捨て、五感を研ぎ澄まして、感じたところから考えるべきではないだろうか。〈「わたし」からの視点〉は、こういう姿勢をもってはじめて、つながりに迫ることができるだろう。

(2010年5月24日受付, 2010年5月27日受理)